

# 若者が集まる公民館にするために

## ―癒しのサンマづくりは公民館の古くて新しい役割―

徳島大学開放実践センター助教

西村 美東士

僕は一九九一年に「生涯学習か・く・ろ・ん―主体・情報・迷路を遊ぶ」（学文社）を書いた。そこでは、教育の真髄は、学習者の「個の深み」と出会うことであるとした。一九九三年の「こ・こ・ろ生涯学習―いばりたない、いりません」（同）では、「こ・こ・ろを開く態度変化の学習」の意義と方法を探った。

一九九七年の「癒しの生涯学習―ネットワークのあじわい方とはぐくみ方」（同）はその延長線上にある。そこでは、僕が年間講師を務めていた東京都の狛江市中央公民館青年教室「狛プー」（狛江プアロー教室）などを紹介し、「癒しのサンマ」の意義について次のように主張した。

サンマとは、時間、空間、仲間の三つのマ

（間）のことで、今の子どもにとって、本来は子ども会関係者などが提供する「遊びのサンマ」が欠けていると提起した言葉である。青年や大人たちはどうか。子どもたちと同様にサンマの不足にあえいでいるではないか。ゆ

っくりしたい、自分らしさを取り戻したい、本当の友だちが欲しい……。僕はそこで、現代人が求めているものを「癒しのサンマ」と呼ぶ。サンマであるから、日常のすべてを癒しに当てようというわけではない。せめて一週間に一回くらいはサンマがあって、「ああ、〇曜が近づいてきたな」と思えるだけでも、その一週間は元気に暮らせるだろう。サンマが癒しとして機能するための条件としては、相互承認、自他受容、支持的風土、水平異質

交流などが考えられる。

そして、公民館も得意分野としているはずの「自己決定活動」を取り上げて、次のように評価した。

僕は、人びとを癒されたい状態に追い込む「上下同質競争社会」において、癒しを提供する「水平異質交流」を生み出すサンマが突出的に存在していると考えている。それは、自己決定の社会的活動としての①生涯学習、②ボランティア、③地域活動（市民活動）の三つである。そこでは、自立した者どうしが相互承認し合い、あるがままの自他を肯定的に受け入れ合って（自他受容）、のびのびと異なった個性をはぐくみ、発揮し合う。さらには、そこで、他者や社会に貢献できる有用な自己

を再発見し、また、他者からその認知を受け  
て自他への信頼を深め、個を深める。

サンママについては、僕の後に、狛アリーの年  
間講師を務めている神原正博が、一九九九年  
三月、次のように説明してくれている。(全日  
本社会教育連合会「社会教育」)

いつ参加し始めてもよく、いつやめてもよ  
く、いつ来てもよく、いつ帰ってもよく、こ  
の活動内容は参加したいが、この活動内容は  
パスするといった時間。初めて狛アリーに参加  
する人に対して、暖かく輪の中に受け入れる  
ことができるコミュニティな空間。多種多様  
な職業を持った楽しく、おもしろい仲間。

同月には僕はこの増補版を発刊し、癒しの  
サンママの公共性について次のように補足し  
た。

「出会いの努力」を本人がしない限り、本  
当に癒されることはありえないだろうと僕は  
思っている。また、「自分さえ癒されるのなら、  
社会や宇宙の客観的事実なんかどうでもよい  
から、とにかく信じてついていこう」といった  
一部の若者の「癒し」志向の事態に対して、  
社会の側が本当に癒される人間関係を提案す  
ることは緊急事項といふべきである。そうで  
なければ、教育がめざすべき個人の自立や、  
望ましいコミュニティ形成、ネットワークづ  
くりなどはできようがない。

戦後、若者たちは公民館の主流派の一員で  
あった。

今、①家族関係の病理、②教育システムの  
弊害、③内なるピアコンセプト(仲間意識)、  
という現代社会の癒されない三要因(自著「癒  
しの生涯学習」)の中で傷つき、あがく若者た  
ちに、公民館は再び自らの持つコミュニティ  
形成支援の機能を表明すべきである。この機  
能自体は確かに古くからのものといえる。た  
だし、「癒しのサンママの提供」という姿勢と方  
法は、「癒しただけでは「非教育的」と誤  
解されるほどの「新しさ」が要求される。

本稿では、前記著書に含まれていない最近  
の自著論文、一九九九年三月「癒しの公民館  
―新しき伝統」(全日本社会教育連合会「社会  
教育」)、同月「地域における公民館活動の現  
状と未来―癒されるコミュニティの創出に向  
けて」(社会教育協会「生涯学習の未来像」)  
をもとに、社会教育機関に純化される前の、  
戦争で傷ついた人びとと心を社交や自由な雰  
囲気によって癒そうとした時代の公民館の役  
割を再評価する。そのうえで、一九九八年十  
一月「癒しのサンママと若き旅人たち―地域若  
者文化のはぐくみ方」(青少年問題研究会編  
集・総務庁青少年対策本部協力「青少年問題」)  
をもとに、先述の「新しさ」の具体的な姿を  
提案する。

## 一 癒される場としての公民館に戻れ

寺中作雄の公民館構想(寺中構想)は、一  
九四九年の社会教育法より一足早く、一九四  
六年に「公民館の設置運営について」(文部次  
官通達)として結実した。公民館は「町村民  
の親睦交友を深め、相互の協力と合を培い、  
以て町村自治向上の基礎となる社交機関」と  
され、この「社交機関」については、「堅苦し  
く窮屈な場でなく、明朗な楽しい場所」とさ  
れた。「町村民の教養文化を基礎として、郷土  
産業活動を振興す原動力となる機関」とも  
されたが、これについても「性別や老若貧富  
で差別することなく、自由な討論と他人の意  
見への傾聴」などとされている。差別のない  
「傾聴」なのである。本構想は、「民主主義的  
訓練」に機械的に固執することなく、戦時の  
暗く傷ついた人びとと心を、社交や自由な雰  
囲気によってなんとか癒そうとしたものと考  
えられる。

これに対して、社会教育法では、「実際生活  
に即する教育、学術及び文化に関する各種の  
事業を行い、もって住民の教養の向上、健康  
の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、  
社会福祉の増進に寄与する」とされ、法的根  
拠が与えられた。このことについて、「社会教  
育施設という性格が強まった」という評価を

するほうが普通である。

しかし、僕は、公民館の公共性とか教育機関としての性格とかいうものは、人びとが心傷つた現代社会においては、むしろ寺中構想の「伝統」を基盤にしたほうがよいのではないかと考える。

今日、癒されない現代社会において「癒されるコミュニティ」を創り出そうとするならば、社会教育機関として「純化」される前の「社交機関」の意義を確認すべきではないか。

その後、全国公民館連合会「公民館のあるべき姿と今日の指標」（一九六七年）による役割規定、①集会和活用、②学習と創造、③統合と調整、いわゆる「つと」「まなび」「つなぐ」が公民館の間では大方の合意となる。そして、公民館活動の究極のねらいは住民の自治能力の向上にある、とされた。もちろん同指標では心のつながりなどの要素も意識されてはいたはずだが、公民館の現場では表面的に受け止められ、個人的・社会的学習課題の解決（生涯学習）と、それによる住民としての自治能力の向上ばかりが叫ばれ、そのスローガンは不信と孤立の一般社会においては空しく響いているだけのように僕には感じられるのだ。「社交機関」が現代的に転化した形での癒しの機能にもっと自信を持つべきではないか。

以上の趣旨に基づき、公民館が若者に癒しのサンマを提供するに当たっての「新しいあり方」について提案したい。

## 二 地域に囲い込もうとしないで

### ——若き旅人たちの巣立ちの場

狛ブーでは、他市、他県からも若者がやってくる。彼らは、よその地域からの風を狛江に吹き込んでくれる若き旅人である。彼らは口をそろえて言う、「ジモティーはラッキーだなあ」。ジモティーとは地元民のことである。夜、遅くまでいても、楽に帰宅できるのがうらやましいのだ。ジモティーとしても「狛江っていいところだよ」とまんざらでもなさそうだ。実際、職場から遠くなるのに、狛江に引越してきてしまったメンバーさえいる。しかし、彼らとして、また、いつ巣立ってしまふかはわからない。

地域に対する若者の愛着や帰属意識は、こんなところで十分だと思う。「自らが居住する地域で活動しないなんて」と考えるのは、「若者にとつて地域とは」というのではなく、「地域のために若者をどう活用するか」という逆立ちした発想である。これに似た逆立ちが、もうひとつある。「この地域で育ったのだから、この地域に還元するための活動を」とい

う地域からの若者への押しつけである。視野の狭い地域主義に凝り固まった大人の御都合主義が、若者の巣立ちを引き止めようとしている。公民館は、地域の御都合から距離を置いたオープンマインド（開かれた心）を持つ必要がある。

## 三 ノリを押しつけないで

### ——鬱の時代の「個の深み」

東京都青少年センターの運営会議で、僕があるにぎやかなイベントを提案したところ、同じく委員をしていた狛ブーの前衛芸術の女性講師から、「西村さんね、今の時代の気分は『鬱』なのよ」と言われた。たしかに、躁の時代のパブリーな空騒ぎにはみんな飽き飽きしているようだ。

僕のメールアドレス（インターネット）を利用してある若者の発言を聞いて取り、「実行委員とかいう言葉には、なぜか拒絶反応が出るんですよ。どうも、大学の時の学園祭実行委員会（非自治会）のイメージが強烈で……。なんというか、単一のノリしか認められないような感じとでもいうんでしょうか。結局、今の自分のノリがその集団のノリと合うような人じゃないと定着しないんです

よね。そしてますますその集団内部で閉じた世界ができちゃって、強化されていく。その最悪なところは、彼らのノリでの参加を強要されてしまうということです。」

このように個を大切に現在の若者が求めている出会いとは、無意識ではあってもピアコンセプトによる同一化を避け、一人ひとりの「個の深み」と静かに対面し、しみじみとサンマでの出会いを味わう性格のものだ。

#### 四 個人としてとらえて

##### ——学習は個人的事象

ロンドン大学教育研究所大学教授法研究部が一九七六年に刊行した「大学教育の原理と方法」は、大学の教員訓練研修のために作られている。そこでは、「学習は本来個人的事象であり、学習者自身が、自分のペースで、自らの興味や価値観、能力、レディネス（学習への準備状態、背景となる体験、これまでの学習や訓練の機会といった要因に応じて達成していくもの）であること、すなわち「学習は個人的事象である」ことが基本テーゼになっている。したがって、「多人数で行う講義」については「教師と個々の学生との間の物理的・心理的距離」などから「大学教育の教授形態として最も一般的なものではあるが、こ

れまで述べてきた学習の諸原理とは最も相容れにくい形態」と言い切っている。

このテーゼは、極めて個人的事象である「癒し」について、そのサンマづくりを公的機関が支援しようとする場合、一層重要になろう。特に若者に關しては、集団一斉承り型はやめたいほうがよい。

#### 五 大人としてとらえて

##### ——若者は保護や管理の対象ではなく、自己決定主体

中学生を過ぎたら、「まだ子ども」ではなく若い大人すなわち「ヤングアダルト」としてとらえるほうがよい。「子ども」と呼ばれるのではなく、「知る権利」などを保有し、よって責任があるという意味での「アダルト」と呼ばれることによつて、そう呼ばれた人自身が、保護と管理の下に置かれ続けすぎた「子ども」ではなく、自己決定する「成人」に近づくことができる。場合によっては、子どもに對してだつて「紳士淑女」として扱えばいい。

#### 六 後ろ向きを否定しない

##### ——積極・消極の自己決定の尊重

「最近の若い人は積極性がない」、「気まぐ

れで信用できない」とよくいわれる。しかし、大人だつて、だれだつて、どんな状況でも積極的などという人はいない。もし、いるとしたら、その人はむしろ積極、消極を自己決定できていないとさえいえるかもしれない。自己決定活動のエネルギー消費について、再びモーニングリストから。

「やりたくてやること（楽しいこと）に使うエネルギーと、あんまり乗り気じゃないけどやらないといけないからやること（楽しくないこと）に使うエネルギーがある。たとえば、人に会いに行つて、かえつてうまくいなくて落ち込んだりする。それをまた、しばらくして気を取り直して、違う人に会いに行くと、そんな感じのときのことです。

人に会いに行く→エネルギー消費量は小／気分は楽しい。↓そこで落ち込んだ場合、気を取り直す→エネルギー消費量は大／気分は楽しくない。↓違う人に会いに行く→エネルギー消費量はやや大／気分はやや楽しい。」

この「気を取り直す」前の落ち込みにあるとき、それを静かに受け止めている彼は、たとえ外からは後ろ向きに見えても、個の深いプロセスの中にある。そういうときは、徹を飛ばしたりせずに、そつとしておいてあげてほしい。森田正馬の臨床心理学では「流転」（解決）のためには「気になることは気に

すればよい」と説いている。

## 七 教育つばくはないのが好き

### —— 双方向ライブこそ教育の姿

ある青少年センターの若手スタッフが、メーリングリストで次のように発言した。

「よく利用者や関係職員には『教育つばくなくていいよね』とか、『なんでそんな事業ができるの』っていわれることがあります。」

僕は次のようにレスポンスした。

「青少年センターの事業は教育じゃないからなんでしょね。社会『教育』の世界の僕としては悔しいです。でも、教育に対する固定観念に安住している人が教育をやっていると、マイナスとしての『教育つばさ』が生ずるのであって、本当は教育は『教育つばい』ものではないと思います。」

たとえば、校長が朝礼台に立つのは、数百人もの子どもたちから見えやすいようにという配慮であるはずであって、もしこれが、過疎の村の数人の学校と同じようにやっているとしたら、教育者としての見識が疑われるわけです。幸いにもそんなに少人数なら、子どもたちの視点まで降りていって、まさに双方向リアルタイムのおしゃべりをすればよい。そういうライブ（生演奏）感覚こそが本

当は『教育つばい』姿なのだと思います。」

同じ彼が再びレスポンスしてきた。

「私が中学校の教壇に立っていたときより、今の仕事のほうがおもしろいです。」

（中略）

マイナスとしての教育つばさ——説得、というイメージがあるんでしょうか。」

僕は次のように返した。

「説得じゃないでしょうね。だって、僕だったら、一生懸命包み隠さずに、真正面から僕を説得しようとする人がいたら、その人の言葉を少なくともよく聴きたいとは思っの。」

マイナスとしての教育つばさ——説得ではなくて、——説教なんでしょう。自分の本音や心配事は隠しておいて、なんの痛みや悩みも感ぜないふりをして、とくとくと朝礼台から語られる話を聞く苦痛、というかばかばかしさ、これが、マイナスとしての教育つばさなのだと思います。」

## 八 大人自らがサンマを楽しんでみせる

### —— 「今しかここだけしか」から

#### 「今ここで」へ

始ブーで紙芝居教室をやったとき、講師の紙芝居屋さんのおじいさんの態度がとて魅

力的だった。参加者が一人ひとり順番に紙芝居をやっているときさえも、自分の紙芝居の準備に熱中している。もちろん、言葉少なげにアドバイスをしてはくれるのだが、基本的にはそのおじいさんは「好きでやっている」だけなのである。だから、太極拳だかんだか、関係ないけれど自分が今関心を持っている話題については一生懸命しゃべる。こういう「自然体」の生き方に若者は共感する。「本物」だからである。

地域の心ある大人たちが危機感に駆られて、しかもついでに「地域文化を継承しよう」と訴えたとしても、多くの若者たちは自己決定してまではついてきてはくれない。その言葉に「うそ」が混じっているように感じられるからである。

それよりも、公民館の大人たち自身が、癒しのサンマに自ら癒される思いを持てるようになることこそ大切なのではないか。そうすればその人の「説得」は「本物」になる。「今ここで」あるいは「今を生きる」という言葉がある。しかし、「今ここで」ではなくて、「今しかここだけしか」（どうせ将来は自己決定の生き方など無理だから）という絶望的な時代の気分が高校生などの若者たちを支配しているように思える。そういうとき、職員や公民館を取り巻く大人たちこそ、「今こ

で」の公民館での自己決定活動の楽しみ方を示すことができるのだと思う。

## 九 癒しの電子メディアを活用しよう

### ——親密と距離の両立

僕が担当する大学公開講座「私らしさのワークショップ」で、転職が話題になったと電子メールで報告したら、受講する若者から次の電子メールを受け取った。

「転職のことで、僕はその前に正式に就職しなければなりません。でもなんか就職してしまおうと大切な何かを失ってしまおうような…。それが何かはつきりとわからないけど、両親は「お前はだいぶ損してる」とボーナス期になると言うけど（私はボーナスがないので、世の中お金じゃないと思うし、決して負け惜しみじゃない。結局自分が納得した人生を送つたらいいと思う。偉そうなことはいえないけど、そんなわけで先生のアドバイス）そうそう、その調子。なにも自分を無理して変える必要はないんじゃないかな」は、心がなんだか軽くなりました。感謝、感謝。ただ僕は、生き生きと生きたい。人生は難しいけど、なんか楽しいです。それではまた。」

僕は、それより以前の彼からのメール「自発的に参加したボランティア研修会で、積極

的に発言できなかったが、でも一つだけ自分のやりたいことを言えたので、よしよしよつ」に対して「そうそう、その調子」と返していたのだ。自己受容のきっかけを提供することができてよかったと思う。

今、若者たちは、本名も顔も知らないのに親密になれるなど、従来の浅い／深い、素顔の自分／仮面の自分、という枠組では理解しえない新しいコミュニケーションをインターネット等を通して行おうとしている。身近な人には言わないことでも、電子メディアを通して他者になら言えるということがある。これを「状況主義的自分らしさ」あるいは「自己の複数性」の表れと見ることが出来る。公民館はそれを受け入れる機関でありたい。

若者たちのほうも、インターネットであれば、今までとは違う世界に飛び込むことに多大な勇氣は必要ない。世界が広がることによって、今まで思い込んでいた「自分」というものから解き放たれる。「自分はこうだ」という勘違いからも自由になれるかもしれない。

逆にこの新しいコミュニケーションのマイナス面としては、それが無意図的に行われていくうちに、当初求めていた「距離を保つた親密性」ではなく、現代社会一般にはありがちな、回避したかった関係、すなわち、内面まで踏み込んでくるからうざつたい、あるい

は逆に、距離があるからわかり合えない、という感覚をもたらしものになってしまふことが多い。

現代的なコミュニケーション形成を本業とする公民館なら、このジレンマを乗り越える（電子的仮想空間においても）「癒しのサンマ」のあり方を提示できるのではないか。この新しい道具を、癒されるコミュニケーションの道具として上手に使って見せてやってほしい。それを見て、若者たちも、これを癒される道具として使いこなせるようになるだろう。公民館がそこで示すべき究極の姿は、欠点だらけの私たちが「みんな違ってみんないい」（金子みすゞの詩）と思ひ直し、自他への信頼と共感を取り戻すことであり、親密さと（適度な）距離の両立が少なくとも公民館などの突的なサンマにおいては可能ということである。

後者は、現代社会や人間関係の宿命に反するともいふべき内部矛盾をはらんだ課題かもしれない。「今の社会がどうあれ、公民館の仕事なのだから無理にでも実現せよ」とは、僕にはいえない。しかし、少なくとも自らの可能な範囲内でそれを追求することは、現代公民館の楽しい本務であると思う。そして、それは、ネットワーク社会における若者に対する自立支援の古くて新しい姿である。